

攻撃性と音楽の嗜好に関する研究

○劉蔓儀・岩永誠

(広島大学大学院人間社会科学研究科)

研究の目的

好きな音楽を聴取すると気分が改善され、身体的リラクゼーション効果が得られることが明らかにされている (Buffum et al., 2006; Davis & Thaut, 1989)。しかし、攻撃性と音楽の好みとの関連について一貫した知見が得られているわけではない (Strabeurger, 2002; Schwartz & Fouts, 2003)。原因としては音楽ジャンルの多様化と複数のジャンルの要素を交えたクロスオーバー音楽が増えてきていることから、ジャンルにより音楽を分類することで音楽の特徴を区分けすることが難しくなっている。そのために、音楽のジャンルよりも、音楽の感情価に基づいた検討を行う必要がある。

攻撃性は感情的側面と行動的側面の観点から研究が行われてきた。日本社会は和を重んじる集団主義の文化と言われていることから (Triandis, 1994)、日本人は行動的側面の攻撃性を抑制すること (Ekman & Friesen, 1975; Gudykunst & Nishida, 1993) や、攻撃性を抑圧することが抑うつに関連することがわかっている (上野・丹野・石垣, 2009)。そのために、本研究では、以下の5つの仮説を立てて、攻撃性を顕在性・非顕在性攻撃に分けて曲印象との関連を検討することを目的とした。仮説①顕在性攻撃高群が覚醒的な音楽を好む。仮説②非顕在性攻撃高群が鎮静的な音楽を好む。仮説③非顕在性攻撃低群顕在性攻撃高群が覚醒的な音楽を好む。仮説④顕在性攻撃低群、非顕在性攻撃高群が鎮静的な音楽を好む。仮説⑤顕在性攻撃高群及び非顕在性攻撃高群が覚醒的な音楽を好む。

方法

対象 有効回答の89名(男性37名・女性52名、日本人73名・中国人16名、平均年齢20.8±1.98歳)を分析対象とした。

質問紙 グーグルフォームを用いたウェブ調査を行った。①フェイスシート、②好きな曲の曲印象尺度、③歌詞への共感尺度、④攻撃性尺度、⑤音楽聴く習慣、音楽的経験の有無の回答を求めた。

結果と考察

各尺度において因子分析を行い、各因子は高い内の一貫性であることを確認した ($\alpha=.791 \sim .945$)。

活動性における顕在性攻撃の主効果が有意 ($F(1, 85)=7.397, p=.008$) で、顕在性攻撃が高いと活動的な音楽を好むことがわかった。顕在性攻撃と非顕在性攻撃の交互作用 ($F(1, 85)=4.229, p=.043$) も有意となった。下位検定の結果、顕在性攻撃低群において非顕在性攻撃高群の得点が高いことがわかった ($F(1, 85)=4.017, p=.048$)。高揚における顕在性と非顕在性攻撃の交互作用が有意傾向 ($F(1, 85)=3.259, p=.066$) であった。下位検定の結果、顕在性攻撃低群において、高揚の得点には非顕在性攻撃低群の方が高いことがわかった ($F(1, 85)=4.170, p=.044$)。

本研究の結果、仮説①と仮説③が一部支持され、仮説②④⑤が支持されなかった。それは曲印象尺度の項目が少ないことから、曲の特徴をカバーできていないからであると考えられる。また、音楽の感情的性格と感情的反応が異なり (Schubert, 2007)、特に被験者が好きな曲を用いる場合にずれが大きくなる可能性があることが明らかになった (山崎, 2009)。曲の認知度によって曲評価に差があることも指摘されていることから (中井・三石, 2004)、今後質問紙で回答もらった曲の感情価も他の参加者に評定してもらう必要がある。

Table 1 各群の平均値と標準偏差

	活動性		高揚	
	非顕在低	非顕在高	非顕在低	非顕在高
顕在低	2.47 (0.89)	3.12 (0.94)	3.56 (0.99)	4.21 (0.84)
顕在高	3.53 (1.10)	3.26 (1.07)	3.75 (1.10)	3.58 (1.01)